

## 木に名前をつけよう

佐野由輝（大網白里町）

日 時：2011年12月4日（日）10：30～12：00 天気：晴れ

参加者：6名（大人3名、子ども3名）

担当指導員：佐野由輝、山岸文子

日本には、約千種類の樹木が生育しており、それぞれに名前がつけられています。それはそれで、意味のある名前、図鑑などでその由来を調べるのも楽しいのですが、今日は、手垢のついた書き込みだらけの図鑑は本棚の奥にしまい、純粋に目の前の樹木を見つめ、感じたままに、思いついたままに名前をつけてもらうことにしました。

参加者たちがどのような名前をつけてくれるのかひやひやどきどきしながら、スタートしたのですが、そのような心配は一瞬にして消え去りました。まずは、男の子が、観察路入口付近のスギの木を見て、「二本足で立っててっぺんがほうきみたいになっている」と鋭い観察眼を披露してくれたかと思うと、指導員そっちのけで、3人の子どもたちによる命名合戦が始まりました。木の肌が毛羽立ったスギの木を「ゾンビの木」、イヌシデの交差した木目を見て「木の中の木」、2本の木が重なり合って幹の一部が癒合している木を「バツテンの木」、ぼう芽更新を繰り返したコナラの根株を見て「お化けの横顔」、スギの幹の地衣類を見て「目玉の木」等々。下見の時に、指導員が見つけた名前をつけやすそうなおもしろい木には見向きもせず、指導員が気づかなかった木のおもしろさを次々と発見し、指導員の方が勉強になりました。

若いスギ林に入る時には、「スギのトンネルだー」とはしゃぎながら、大人には見えない何か（ととろ？）を迫りかけるように3人がトンネルの奥へ走っていきました。道の途中にはモグラの通り道で盛り上がった箇所があったのにそれにも気づかず、「前ばかり見て足下には気づいていないな」とあきれていたところ、突然、一人の男の子が足を止めて、「噴水だ」と道の中央を指さしました。見ると、雨水を節の中に貯めた竹の切り株が。一瞬でも子どもたちの観察力を疑った自分を恥じました。

どンドン森の中へ突き進もうとする子どもたちの探検心を少し我慢してもらい、やや明るい落葉広葉樹林の中で、「一番好きな木」を探してもらうことにしました。すると、3人の子どもたちは、枝の場所により微妙に色の違いがあるオオモミジ、ジャックと豆の木のように天まで届いていそうなフジヅル、ナナフシがのんびりひなたぼっこしていたイヌシデ、それぞれが思い思いに一番の木を選んでくれました。子どもたちに選んでもらった木も大喜びだったことでしょう。

少し落ち着いたところで、森の中にぽっかり空いた大きな穴に移動し、鋭くなった観察眼で、穴の正体を推理してもらいました。すると、「田んぼに水を通すための水路」、「昔の人（縄文人）のたき火の跡」、なるほど一理ある回答ですが、答えは、炭焼きがま。森が生活の一部だった昔の人の暮らしを説明しました。

最後に、ナンテンの木の前で、指導員の身内がナンテンの葉っぱで助けられた実話を話して、お土産にナンテンの木とフウセンカズラの種で作った「南天九猿（難が転じて苦が去るの意）」を配り、観察会を終わりました。

今回は、指導員の出番がほとんど無く、子どもたちに企画も運営も任せた感じになってしまいましたが、それもそのはず、そもそも今回のテーマの発案者は、イヌシデの切り株を「長靴の木」と命名した子ども（今回の参加者の一人）なのでから。